神奈川県・私立
三浦学苑高校

学校改革

教師の意識改革を図り生徒・進路・教科指導の総合的な改革を推進

◎2009年度の創立80周年を機に、校名を三浦高校から現校名に変更し、校舎や制服のリニューアルを行う。13年度には普通科に「特進コース」を新設し、進学指導の強化を図る。校訓は「初心忘るべからず」。部活動が盛んで、サッカー部や卓球部、女子柔道部、ソフトテニス部などが全国レベルで活躍。

設立
1929（昭和4）年

形態
全日制／普通科・機械科・電気科／共学

生徒数
1学年約500人

13年度入試合格実績（現役のみ）
私立大は青山学院大、学習院大、中央大、法政大、成蹊大、國學院大、芝浦工業大、日本大、駒澤大、神奈川大など延べ226人が合格。他に短大21人、専門学校139人、就職82人。

住所
〒238-0031
神奈川県横須賀市衣笠栄町3-80

電話
046-852-0284

Web Site
http://www.miura.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎各指導が教員個々の裁量に任され、指導基準もなかったため、進路実績にばらつきが生じ、進路未決定者も多かった
STEP 1

実践
◎生徒指導の統一化を皮切りに、進路・教科指導面でも学校全体での取り組みを開始
STEP 2

成果
◎教師間の意識統一がなされ、指導の足並みがそろう。フリーターや進路未決定者の人数が激減
STEP 3

指導方針の不統一が生徒の進路にも影響

神奈川県の三浦半島に位置する三浦学苑高校が、改革に着手したのは2001年のことだ。03年度の学習指導要領の改訂を控え、「新カリキュラム検討委員会」を発足させたことがきっかけだった。同校は、生徒指導においては横須賀市内でも定評があったが、その実情は、教師一人ひとりに指導が任されているというものだった。宮野くに子教頭は、当時を次のように振り返る。

「あの頃の教師たちは、言わば職人集団でした。それぞれが個人の力量で、生徒を指導していたのです。しかし、それは裏を返せば、学校としての指導方針がなかったということ。校則はあっても、教師個々の裁量による指導を行っていたのです。指導に関する評判が良かったのは、力のある教師が何人かいたからです。生徒の容儀や生活態度に乱れがあっても、波風を立てぬよう、強くは注意しない教師もいました」

生徒指導だけでなく、進路指導や教科指導でも、教師個々に任される部分が大きかった。三者面談の有無や模試の実施状況、指定校推薦入試の校内基準といった重要事項も、全校で統一した方針はなかった。

このことは、生徒の進路にも影響を与えてい

た。進学や就職の実績は、年度だけでなくクラスによってもまちまちで、進路が決まらずに卒業する生徒も多かった。例えば、04年度の卒業生498人のうち、進学浪人、就職浪人、フリーター、進路未決定者、その他の合計人数は97人。つまり、卒業生の5分の1は、社会との接点が持てないまま卒業していった。学習進路指導部部長の野櫻（のざくら）慎二先生は、その状況に危機感を抱いていた。

「進学浪人ならともかく、将来の目標さえ決まっていない生徒が72人もいるのは、社会とどう関わっていくのかを、学校側が生徒に考えさせることが出来ていなかったからでしょう。高校としての指導の義務を果たしていないと言われても仕方のない状況でした。また、私は当時、部活動の試合などを通して中学校の先生方と話すことがよくありましたが、本校について『部活動は頑張っているけれども、学習面や進路面で弱い』と言われていたこともあり、進路指導の改善が急務だと考えるようになりました」

三浦学苑高校教頭
宮野くに子 みやの・くにこ
教職歴、同校赴任歴共に34年。「一人ひとりの生徒に真正面から向き合う。生徒や保護者の一点の良さを褒められる教師でありたい」

三浦学苑高校
野櫻慎二 のざくら・しんじ
教職歴、同校赴任歴共に17年。学習進路指導部部長。企画調整室室長。「『日々努力』を目標に、生徒に努力の大切さを説き、自分も挑戦を心掛ける」

三浦学苑高校
中村洋士 なかむら・ひろし
教職歴、同校赴任歴共に14年。情報管理部部長。「生徒一人ひとりと向き合い、その可能性を最大限に引き出すような教育をしていきたい」

アンケートの声で自校を客観視し、まずは生徒指導の基準を統一化

03年度の学習指導要領改訂はカリキュラムが大きく変わるため、学校改革を進める好機だった。しかし、新カリキュラム検討委員会が「面倒見のいい教育」をスローガンとし、職員会議で施策を提案しても、教師の課題意識が希薄なために、賛同がなかなか得られず実現には至らなかった。そこで、委員会は、同校の課題や置かれている環境を客観的に示そうと、在校生、教師、理事会、卒業生、保護者、地区内の中学校を対象に、同校の生徒の印象に関するアンケートを実施した。そこで浮かび上がったのは、「基礎学力不足」「学習意欲が見られない」「生活態度の基本が出来ていない」といった厳しい声だった。

アンケートによる客観的な意見は、教師たちに衝撃を与えた。以前から危機意識を持っていた宮野教頭や野櫻先生らは、アンケート結果を基に改革の必要性を訴え続けた。

「アンケートの結果を示して、『授業を成立させるためにも、まずは体系的な生徒指導が必要』と働き掛けました。順を追ってじっくり話すことで、改革の必要性を理解してくれる先生が増えていきました」（野櫻先生）

まずは生徒指導の統一化が図られることとなった。遅刻の定義、頭髪や服装の注意点などの基準を定め、指導の足並みをそろえたのだ。同時に、指定校推薦入試の校内基準の統一化も図った。遅刻数や欠席日数、生活態度などの推薦基準が明確になれば、担任は生徒に具体的に指導しやすくなる。そうして、生徒指導を徹底した結果、05年頃から服装の乱れや遅刻などは激減した。

偏差値だけでなく、学習状況など生徒を多面的に捉え、響く指導を行う

生徒指導が軌道に乗ってきた06年度には、進路指導と教科指導の強化に乗り出した。

進路指導強化のための施策の1つめは、模試の統一化だ。以前から模試は実施されていたものの、学年団や教師個々が独自に実施の判断を行い、実施の時期も内容もまちまちだったため、経年データなどは蓄積されてこなかった。そこで、野櫻先生は、最初は自分が担任するクラスで、ベネッセの『基礎力診断テスト』（＊1）を実施し、そこから学年、全校へと実施を広め

＊1　ベネッセの『進路マップ』の教材の1つで、幅広い学力層に対応する出題内容となっている。学力を測るだけでなく、テストの実施を契機に進路を考えさせたり、学習習慣の定着状況について把握したりすることも可能。

ていこうと考えた。

「模試の偏差値や全国順位を切り口にして生徒に働き掛けても、それに響く生徒はあまりいませんでした。模試の結果を教科指導にどう結び付ければよいのかを考えあぐねていた時に出合ったのが、『基礎力診断テスト』です。偏差値だけでなく、生徒一人ひとりの学習習慣や進路意識も把握できるので、生徒の内面と学力面の両方を踏まえた声掛けができ、それによって生徒のモチベーションを高められるかもしれないと期待したのです。実際、学習時間が減った生徒に『部活動が大変なのか』と声を掛けたり、希望進路を変更した生徒に理由を尋ねたりと、話題の切り口が広がり、生徒との会話が増えました」（野櫻先生）

模試に学力把握だけでない活用法を見いだした野櫻先生は、まずは他クラスに『基礎力診断テスト』の実施を提案。その良さを実感してもらって賛同者を増やし、次に学年、そして学校全体と実施を広めていった。

大学、専門学校が一堂に会するガイダンスで生徒の視野を広げる

進路指導強化策の2つめとして挙げられるのが、生徒全員が参加する2つの進路ガイダンス、「進路を考える日」（3月）と「進路相談会」（4月）だ。「進路を考える日」には、大学、専門学校の教職員が来校し、模擬授業を実施する。「進路相談会」では、体育館に学校ごとのブースを設けて、生徒の進路相談を受ける（**写真**）。希望の模擬授業を受けた翌月に相談が出来るようにして、進路への意識を高めることを狙いとした。

写真　進路ガイダンス「進路相談会」（4月）の様子。生徒は体育館に用意されたブースで学校の様子を尋ねたり、受験の相談をしたりする。これにより、進学フェアやオープンキャンパスに参加しづらい部活生も、いろいろな学校に一度に質問ができ、好評だ。

「校内で実施することで、外部の進学フェアになかなか出掛けられない生徒でも参加できるようにしました。実施初年度の協力校は専門学校が5校ほどと小規模なものでしたが、13年3月に実施した際には、大学が約30校、専門学校は約20校に協力いただきました。本校の教師たちは、真剣に模擬授業を受ける生徒の姿に感銘を受け、進路指導への意欲を高めています」（宮野教頭）

授業中に学び直しを行い学力の底上げを図る

教科指導改革の1つは、授業中に行う学び直しだ。基礎学力の底上げを図ろうと、授業で小・中学校段階の学習内容の復習をする時間を確保している。きっかけは、機械科と電気科の1年生で、工業専門科目の授業に学び直しを取り入れたことだった。情報管理部部長の中村洋士（ひろし）先生は次のように話す。

「機械科や電気科には、小学校段階の計算問題に苦労する生徒が少なくありません。しかし、専門科目を学ぶ上で計算は避けて通れず、つまずいているところを放っておいては学びが先に進みません。プリントなどの家庭学習に頼っていては生徒の取り組みにばらつきが出ると考え、授業で小・中学校段階の計算練習に取り組ませるようにしたのです」

12年度には、1年生全員に国語、数学、英語の授業で中学校段階までの復習を行った（＊2）。高校の学習進度に遅れが出ないよう、この3教科については1単位ずつ増やして対応。高校入学直後の意識の高い時期に集中的に取り組ませたことで、学力の底上げは確実に進み、GTZ（＊3）でDゾーンの生徒は大幅に減った。更に、生徒のアンケートでは、約66％が「基

＊2　具体的には、入学時から5月の中間考査まで、ベネッセの『マナトレ』（ベネッセの「進路マップ」の教材の1つ。小・中学校範囲の学び直し専用のシステム教材）に取り組ませた。
＊3　生徒の学力到達度を＜S＞～＜D＞のゾーンで示す、ベネッセの学力指標。Dゾーンは、「基礎・基本養成レベル」を指す。

礎学力が上がったと思う」と答えた（図）。

生徒も教師も意識が変化し進路決定率が9割以上に

さまざまな改革は、教師の意識を変えていった。職人集団と言われていた教師たちが、指導力向上に向けて、08年度に教科ごとの授業研究を始めた。更に、学校外の教員研修に積極的に参加する教師が増えているという。

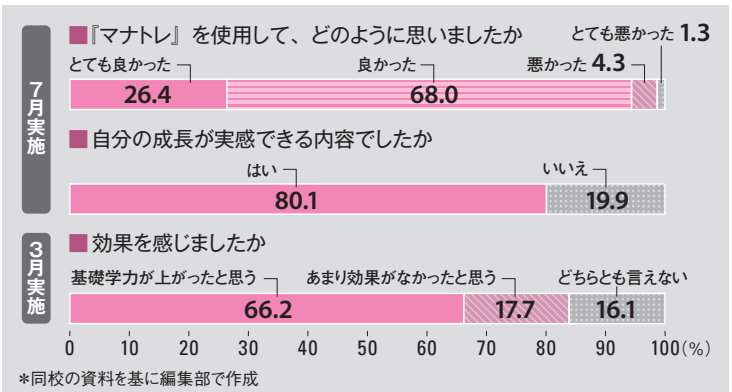
生徒の進路意識も変化した。進学や就職などの目的意識を持って学習や資格取得に努力する生徒が目立つようになり、進路未決定者は減少。11年度の進路決定率は95％まで上がった。

10年間に及ぶ改革を成功させた同校は、現在、「一人ひとりを伸ばす教育」というスローガンの下、新たな改革に乗り出している。13年度、普通科に「特進コース」を新設。更に、文理コースを「進学コース」に、普通コースを「総合コース」として、希望進路に応じた指導を強化していく。

特進コースにはこの春、12人が入学した。目標は国公立大や難関私立大の現役合格だが、それだけにとどまらず、地域に住む外国人との交流、企業訪問などを通して、広い視野を育み、国際的に活躍できる人材の育成を目指す。

「本校での3年間、そして大学進学後の4年間を通して、生徒が社会人基礎力を身に付けられるような教育活動に取り組んでいきたいと考えています。そして、それらの取り組みを、いずれは本校のスタンダードとなるよう広げていくことが大きな目標です。どのコースに入学しても、本校の教育を受けることで学力的にも人間的にも成長し、40歳になってもグローバル、あるいはグローカルに活躍できるような人材を育てていきたいと思っています」（野櫻先生）

図　学び直しに関するアンケート結果（抜粋）



＊同校の資料を基に編集部で作成

『マナトレ』を使った学習に関して、生徒の8割以上が「自分の成長が実感できた」「学び直しをして良かった」と回答している。今後は進研模試やスタディーサポートの結果からも、学び直しの成果を検証していく予定。

若手教師が語る、指導変革への情熱

思いを形にするには まず「自分が変わること」が大切

学習進路指導部部長 **野櫻慎二**

改革当初、新カリキュラム検討委員会の一員として、さまざまな提案を行いましたが、先生方の意識を変えることは予想以上に厳しいものがありました。より良い学校づくりを目指そうとしても、それに懐疑的な先生もいました。そうした教師間の停滞した雰囲気を感じ取るからか、「どうせ自分は何をやっても駄目だから」と自分を卑下する生徒が多いことも気になっていました。どうすれば学校が良くなるのか。解決のヒントを求めて書店へ出掛け、ジャンルを問わず本を読みあさる日々が続きました。

そんな時、ある本に「自分が変われば相手も変わる」という一節を見付けました。私は、自分の考えを一方的に伝えるだけで、意見が合わないと相手に攻撃的な態度を取ることで変化を求めていたのです。「悪かったのは自分だ」と気付くと、気持ちが楽になりました。そして、「どのような言葉で説明すれば相手を説得できるのか」と前向きに考えられるようになったのです。自分が考えていることをきちんと筋道立てて説明をしたら、理解を示してくれる先生方が現れ、改革が軌道に乗り始めました。

改革によって学校の体制が変わり、教師間に「新しい取り組みを積極的に行っていこう」という空気が流れるようになると、生徒たちの間にも変化が起こりました。部活動や生徒会、ボランティア活動に進んで参加する生徒が増えていったのです。そうした生徒たちの姿を見るのはとてもうれしく、今後も自分に出来る形で生徒の成長を支援していきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2012年4月号指導変革の軌跡「宮城県黒川高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）